

監 査 論



監査論担当 野村 礼華 講師

本試験をふりかえって～出題傾向・合格ライン等～

久野 次に5月28日3限(13:40着席, 14:00～15:00)に行われた監査論です。

監査論の出題数は、平成25年試験までは20問、平成26年試験では16問、平成27年試験では18問、平成28年第Ⅰ回試験では20問でした。今回の試験では想定どおり20問出題各5点でしたね。

先ほどは「全体として、判断しづらい問題が多かった印象です。焦らず落ち着いて、問題を読み切れたかどうか勝負の分かれ目。60%得点できればまずまず。」ということでしたが、前回平成28年第Ⅰ回試験と比較して、量的なものも影響するでしょうが、難易度は変わったのでしょうか。

野村 平成28年第Ⅰ回試験では55%～60%得点したい所でした。今回は60%～65%取りたいところです。問題数は前回同様20問でしたので、前回よりも1問多く取れば良く、獲得したい得点には大差ありません。しかし、前回は、各問題の難易度をみるとAランクが7問、Bランクが9問、Cランクが4問でしたので、易しい問題と難しい問題が分かれていたような印象だったのに比べて、今回は解答一覧にもありますように、Aランク4問、Bランク13問、Cランク3問と、Bランクの問題が非常に多くなったという状況です。正答できている！という確信を持てる問題が減ってしまったことで、精神的に不安を感じたまま問題を解き進めていかなければいけなかったことでしょう。

また、時間配分についてですが、平成28年第Ⅰ回試験では問題数は増えたものの、全体の行数自体は平成27年第Ⅱ回試験よりも若干少なくなっていました。ところが今回は、問題数は増えたまま、行数は32行増の272行となっていましたので、悩ましい記述が多かったことと相まって、時間がカツカツだったのではないのでしょうか。Cランクの問題を早々に捨てることができたか、ということもポイントとなったでしょう。いずれにせよ、苦行のような1時間だったと思います。

久野 形式面で気になる点はありませんか。

野村 形式面では問題文が前回とは異なりしました。平成25年第Ⅱ回試験以降は「正しいものが二つ(一つ)ある。その記号の組合せの番号を一つ選びなさい」という問題文が続いていましたが、今回は「正しいものの組合せとして最も適切な番号を一つ選びなさい」でした。正しいものを選ぶということでは変わりなかったのですが、今まで同じ問題文が続いていたことから、問題文をさらっと読み流してしまう受験生は多かったはずですが、もしこれで、平成25年第Ⅰ回試験以前のように「誤っているものを選び」なんていう問題文が混ざっていたとしたら……。考えるだけでもゾッとしますね。

久野 確かにゾッとします……。それでは各問題に対するコメントをお願いします。

野村 問題1は「公認会計士による財務諸表監査の歴史」についての設問です。一つは誤りと判断できるが他3つが……という問題が今回は多いようです。この問題もその類の問題と言えるでしょう。エの誤りには気づいてほしいですね。アイウは知っているか知らないか、という記述ですね。アについて計理士という資格を聞いたことは初めて、という受講生も少なくないでしょう。こんなに一生懸命学習しないと取れないような資格を、違う資格を持っているからといって無条件になれるのか?!という疑いの気持ちでなんとか誤りとできたらよかったのですが、なかなか難しかったはずですが、よりCに近いBランクでしょう。

問題2は「財務諸表監査における固有の限界」です。本問は数少ないAランクのものです。全ての記述が基本的知識であるため、正しいものについても正しいと判断できたはずですが、確実に正答しなければいけない問題でした。

問題3は「公認会計士法」の問題です。アイについてはテキストにも記述がある典型論点です。アは誤りの記述として、

イは正しい記述として判断していただきたい。ウエではより怪しいものを選べたかどうかです。ウが誤りの記述でしたが、市場の番人である公認会計士の中に悪いことをしていそうな人がいた場合に、その事実について報告できる人を利用者に限ることが良いことなのだろうか、と感ずることができれば、エよりもより怪しい記述だと思えたのではないのでしょうか。よりAに近いBランクとして、なんとか正答してほしかった問題です。

問題4は「金融商品取引法監査制度」の問題です。イの正しい記述は見たことがなかったかもしれません。ウの正しい記述は法令違反等事実についての記述でしたが表現がテキスト等とは異なっていました。しかしアエの誤りの記述は、金融商品取引法監査制度の中でも細かくない部分が聞かれているので、Aランクの、正答すべき問題でしたね。

問題5は「会社法上の会計監査人及び監査役」です。問題文の通り、監査役が主語になっている記述もありました。前回の会社法監査制度の問題とは雰囲気が異なっていました。アウの記述は企業法での知識を使って正誤判断ができたのではないのでしょうか。アはしっかり誤りと判断すべきでしょう。エが誤りの記述でしたが、監査役は職務を遂行するために情報交換等を図るべきだろうと、素直に思えた受験生は多いでしょう。論点としては知らずとも、監査論や企業法を学んできた方なら違和感を覚えたはずです。Aに近いBランクとして、正答したかった問題です。

問題6は「四半期レビュー」についての設問です。本問には悩まされたのではないのでしょうか。アについては間違っているところはなさそうだし、ウについては直前答練第2回で出題をしていますので誤りと判断すべき記述でした。しかし、イエも正しく思えたでしょう。しっかり読んだとしてもエについては細かい部分での誤りでしたので誤りと判断するのは厳しかったのではないのでしょうか。Cに近いBランクとして、落としてもやむを得ないでしょう。

問題7は「内部統制監査」についての設問です。内部統制監査の中でも基本的な記述ばかりでした。アイエはそれぞれ短答対策問題集に載せている論点でした。Aランクとして、自信を持って正答したい問題ですね。

問題8は「内部統制監査の監査報告書」の問題です。とにかく文章が長い！ギョっとした受講生は多いでしょう。じっくり読みたいが時間がかかるしだんだん焦ってくるし、と問題文が長くなると落としがちなになります。論点としては基本的で、かつ、アイエ共に答練でも出しているのですが……。精神力との戦いです。Cに近いBランク、ミスしてしまっても仕方ない問題だったと感じます。



問題9は「監査に関する品質管理基準」ですね。品質管理についての出題は細かい論点であることが多いですし苦手意識を持っている受講生も少なくないでしょう。しかし今回はアイの誤りの記述が割と基本的な論点であったと言えます。正しい記述については自信を持てなくとも、誤りの記述は判断できたのではないのでしょうか。Aに近いBランクということで、できれば正答したかった問題でした。

問題10は「財務情報等に係る保証業務」です。イの誤りについてしっかり判断できたのではないのでしょうか。アの誤りについて一瞬読みにくさを感じましたが、ウエの正しい記述についてはそれぞれ全国公開模試・直前答練第1回で出題しているので正しいと判断できるとよかったですね。Aに近いBランク、正答したい問題でした。

問題11は「監査基準」についての問題です。冒頭でも申し上げたように、今回の監査論は時間とも勝負しなければいけない試験でした。知らないものは知らない！と勇気を持って後回しにできたかどうか。えんぴつを転がす時間すらもつたいないですね。Cランク、落としてよい問題でしょう。

問題12は「一般基準」についての設問です。本問は設定・改訂前文を含めて監査基準を広く押さえていないと正答するのは難しかった問題でしょう。アについては直前答練で同様の論点を出題しているのでなんとか正しいと判断できた

として、エの正しい記述についても品質管理基準の設定背景が頭に入っていれば、監査基準の設定当初は存在していなかったはず、という考えに至りますが、正しいものを、自信を持って判断するのは難しいですからね。Cに近いBランクとして、正答できなくても仕方ない所でしょう。

問題13は「監査証拠」についてです。本問の記述は基本的知識で解けること、文章も短い上に、誤りも明らかなです。Aランク、落としてはいけない問題でした。

問題14は「財務諸表の重要な虚偽表示リスクと内部統制」です。エの誤りの記述は典型論点でしょう。誤りとしっかり判断すべきです。イの誤りの記述は正しそうに見えますが、常に、必ずそうすべきだったか、と思えたかどうかです。直前答練第3回でも同様の論点を出していますので記憶にも新しかったのではないのでしょうか・・・そう願いたい所です。アウについても基本的知識として、正しいと判断してほしかったものですね。Aに近いBランクとして、正答してほしかった問題です。

問題15は「専門家の業務の利用」です。本論点も細かい知識部分が多く、苦手とする人も多いのではないのでしょうか。かくいう私も苦手論点でした・・・。しかし、イウエについてはそれぞれ短答対策問題集と全国公開模試でばっちり出題済です。しっかり復習できていればなんとか正答できたのではないのでしょうか。Aに近いBランクといった所でしょう。

問題16は「監査調書」についての設問です。アイエはそれぞれ直前答練第2回と基礎答練第2回で出題済ですが、監査調書の論点における、文書化する・しないとといった類の記述はなかなかややこしい所ではあります。細かいところの知識を問われてしまった、ということでCに近いBランク。自信を持って正答するのは少し難しかったのではないかと感じます。

問題17は「後発事象等の監査」の問題です。細かく、かなり正確な知識を持ち合わせていなければ正答するのは難しいでしょう。本問も後回しにすべきものだったでしょう。Cランク、当たればラッキーな問題でしょう。

問題18は「財務諸表監査における意見表明」です。イの誤りは監査報告書の記載事項を問われているので、細かく正確な知識がなければ誤りと判断できませんでした。アエは正しい記述で、かつ、受験生が知らない話ではないものの、これらを正しいと自信を持って判断することは、勇気のいる行為ですね。なんとか取れるか取れないか・・・本当のBランクの問題と感じます。

問題19は「監査における不正リスク対応基準」の問題です。前回も不正リスク対応基準の問題が出ていました。それと比較すると、より細かい部分が問われました。アの誤りの記述について、どのような場合に不正リスク対応基準が適用されるのか、という知識は知っておいていただきたいかったです。ウの誤りですが、イエの正しい記述の論点は全国公開模試、直前答練第3回で出題しているので、なんとか消去法でたどり着いてほしかったですね。それなりに取れた人も多いのではないのでしょうか。Aに近いBランクとして、なんとか正答したかった問題です。

問題20は「比較情報の監査」です。細かいです！細かく正確な知識が必要です。そもそも比較情報については対策が甘くなっている人が多いでしょう。細かい上にイメージしづらい論点ですからね。ここは周りのみんなもわからないはず、と思っていい問題だったでしょう。Cランクですね。

久野 ありがとうございます。例年通り、と言っているのか、もやもやとした監査論だったのかな。あくまで個人の感想ですが。

さて、1年前の前々回平成27年第Ⅱ回短答式試験・前回の平成28年第Ⅰ回短答式試験は、合格得点比率はさておき、合格者数・合格率・合格者水準は違和感の無いものだったと考えています。前々回・前回の合格率・合格者水準を前提に、短答式試験合格者として監査論では得点比率60%～65%が求められるということですか。

野村 監査論のみの予想合格ラインで考えると、60%～65%取れば、大きな失点にはなっていないでしょう。ミス差し引いて実力で9 or 10問、確率で3問、後は運を使って1問取れたら素敵ですね。

久野 合格者水準として正解しておきたい問題はどれでしょう。

野村 問題ごとのコメントの中でお伝えしましたが、Aランク4問、Aに近いBランク7問。なんとか実力で取れたらよかった部分でしょう。

久野 監査論でAランク・Bランク問題を中心に60%～65%確保できれば他者に大きく引き離されることはないという状況のようですね。

野村先生，ありがとうございました。

財務会計論



財務会計論・計算担当 金杉 光弘 講師

本試験をふりかえって～出題傾向・合格ライン等～

久野 最後に、5月29日4限(15:40着席, 16:00～18:00)に行われた財務会計論です。財務会計論も前回平成28年第I回短答式試験同様、問題1～問題26という構成でした。

先ほど、理論の久保先生からは「しっかりと学習成果を積み重ねてきたか否かが問われる問題」、計算の金杉先生からは「大局を見据えつつ、メリハリを利かせた学習が大事だと改めて感じた」ということでした。

金杉先生、もう少しお話を願えますか。

金杉 財務会計論ー計算(簿記)は要求される知識が多岐にわたり、そのため教材の量も群を抜いて多いです。それでもテキストに掲載している以上、すべての内容に出題可能性がありますので、まずは全範囲について最低限覚えておくべき知識の習得と例題のマスターは欠かせません。全範囲を学習し、自分が立ち向かおうとしている世界の全貌がどのようなものか一望できるようにしておくこと、これが大局を見据えるという意味です。次に、とはいえ、これほどの膨大なフィールドのどこに敵が現れても一撃必殺の配置を構えることは事実上難しいことから、この論点は必殺、この論点は守り固め、この論点はせめて敵勢を食い止める、など出題可能性に応じて力の入れ方を変える、これがメリハリを利かせるという意味です。

今回の本試験では大局観があれば、どの問題を取るべきでどの問題を捨てるべきか、難しいか易しいか、論点はメジャーなのかマイナーなのかという点から判断できたでしょう。そしてメリハリを意識して学習していれば、取るべき問題はやはり普段から出題可能性が高いといわれている内容ですから練習も十分であり、確実に得点することができたと思います。

久野 なるほど。学習は闇雲にやってはダメですね。出題内容、形式、難易度的な面ではいかがですか。

金杉 今回の出題ですが、平成28年第I回試験と分量、難易度とも大きく変わった印象はありません。1問8点の問題が22問中、計算部分は10問、前回は11問でしたから1問減りましたが、おおむね半分ずつ計算と理論という配分になっています。また、総合問題は1題で内容は「連結財務諸表」からと、こちらも前回と変わりません。

久保 財務会計論ー理論の難易度ですが、平成27年第II回試験ないし平成28年第I回試験と比較すると、難易度が若干ですけれど上がったような気がします。特に、平成28年第I回試験は財務会計論の理論部分の難易度が相当程度下がっていた印象だったのですが、それに比べると今回は、少し難化したように思えます。形式面や出題傾向に関しては大きな変更はありません。ただし、1問だけ、選択肢が3つ、つまり、ア～ウで終わっているものがありました。理論問題の割合は少しブレがあるように思えますが、これもあくまでも計算問題と理論問題の割合という話なので、財務会計論全体として形式面や出題傾向に変化があったという訳ではないと思います。最後に、過去問との類似性という点では、毎回の短答式試験でもそうなのですが、一定程度、過去問と類似した出題がなされています。

総括しますと、あんまり大きな変化はなかったということで、受験生にとっては、しっかりと学習成果を積み重ねてきた人が有利になるという問題だったということでしょうか。

久野 それでは、個々の問題についてコメントをお願いします。問題1・問題2は理論ですので、久保先生からですね。

久保 問題1は「財務会計の基礎概念」の問題です。アの選択肢以外は、基本的な問題であり、正誤判定に迷うものはないかと思います。アの選択肢に関しては、連結基礎概念と会計主体論の関連性を問う問題であり判断は厳しかったかと思われますが、他の選択肢から正答に辿り着いて頂きたかった問題です。

問題2は「財務諸表の表示」の問題です。イの選択肢が少し細かい問題ですが、その他の選択肢は基本的な問題で

平成28年 公認会計士第II回短答式試験 特別座談会

財 務 会 計 論



財務会計論-理論担当 久保 慎悟 講師

本試験をふりかえって～出題傾向・合格ライン等～

あったと思います。イの選択肢については、連結の範囲の規定を思い出していただければ、判断できたかと思います。役員や従業員に対する債権債務の規定、つまり、独立掲記しなければならない規定と勘違いしてしまうと間違えてしまいますので、注意が必要です。

久野 次は、計算、金杉先生ですね。問題順をお願いします。

金杉 問題3は「当座預金」の問題です。現金及び預金の論点のうち、銀行勘定調整表の理解が問われています。取引銀行から取り寄せた銀行残高証明書の金額から、銀行側の調整項目を修正して解答数値が求められます。なお、「借入金の利息の引き落とし額は推定する」との記載がありますが、解答には必要ありません。

問題4は「棚卸資産」の問題です。期末商品の評価を中心とした基礎レベルの論点です。注意点としては、売上割引を間違えて売上から控除しない、正味売却価額を算定する際に売価から販売直接経費を引くことを忘れない点です。

問題5は「社債（臨時買入償還、利息法）」の問題です。満期保有目的の債券の利息法に関する例題で、利払日と決算日が異なる場合、年利で与えられた実効利率から1年分の償却原価法に係る利息を算定し、月割（又は日割）計算を行うことは練習しています。本問は期中に買入償還していますから、同様の計算で償却原価を算定し、社債償還損を求めます。

久保 問題6は「繰延資産」の問題です。基本的な問題です。しっかりと正答していただきたいところです。イの選択肢は、また出題されたか～。という感じです。

問題7は「負債会計」の問題です。少し解きづらい印象を覚えます。イの選択肢は典型的な論点ですので、これを軸に判断していただきたかったところです。細かい表現を綿密に検討していくと正しいのか誤っているのか、よく分からなくなってしまうので、ある程度、ざっくりと判断していただく方が良いかと思います。

問題8は「純資産－総論」の問題です。株主資本等変動計算書に関する基本的な問題でした。しっかりと正答していただきたい問題です。

問題9は「キャッシュ・フロー計算書」の問題です。冒頭でも申し上げたとおり、選択肢が少ない問題でした。内容は基本的だと思いますので、しっかりと正答していただきたい問題です。

金杉 問題10は「潜在株式調整後1株当たり当期純利益」の問題です。期中平均株式数、転換社債型新株予約権付社債が権利行使された場合に増加する普通株式増加数、その場合の社債利息の減少に伴う当期純利益調整額と計算を進めていきます。なお、連結の場合、普通株式に係る当期純利益は親会社株主に帰属する当期純利益をベースとしますが、これは短答式でも出題しているので覚えていたと思います。

久保 問題11は「金融商品会計」の問題です。基本的な問題でした。細かい語句の引っ掛けに引っかからないように気をつければ大丈夫だと思います。しっかりと正答していただきたい問題です。

金杉 問題12は「貸倒引当金（貸倒見積高の算定方法）」の問題です。一般債権については貸倒実績率を求めて期末残高に乘じ、貸倒懸念債権についてはキャッシュ・フロー見積法により貸倒引当金を求めます。例題の理解で十分解答可能な内容となっています。

問題13は「ストック・オプション」の問題です。本問では、結局権利行使されずに残っていた新株予約権が何個であったか把握し、公正な評価単価を乗じるだけで解答できます。公正な評価単価が下落する場合の処理は理論でも典型論

点ですから正解できたかと思われます。

久保 問題14は「リース取引」の問題です。貸手がつつりですか～。貸手は重要性が乏しいと思われていたため、対策が手薄だった方が多いのかと思います。幸い、そこまで細かい論点ばかりではなかったので、対策をしていた方は大丈夫だったかと思います。正答が厳しい問題の一つかと思います。

金杉 問題15は「リース取引（所有権移転外ファイナンス・リース取引）」の問題です。基礎的な内容ですが、迷う点があるとすれば利息法の利子率でしょうか。明示的にパーセントで示されていないため、リース債務の当初計上額と初回の利息の比率から推定する必要があります。

久保 問題16は「退職給付会計」の問題です。エの選択肢が少し細かいですが、その他の選択肢は、基本的な論点や改正論点でしたので、学習の成果が出やすい問題だったかと思います。しっかり正答していただきたい問題です。

金杉 問題17は「ソフトウェア（市場販売目的）」の問題です。本問は例題レベルの問題といえます。均等配分額との比較を忘れない、見積の変更があったときの数量はいずれを使うかに気を付けながら計算します。

久保 問題18は「企業結合」の問題です。基本的な問題です。しっかり正答していただきたい問題です。

金杉 問題19は「セグメント情報（報告セグメントの決定）」の問題です。出題頻度の低い論点からの出題なので、対策が十分でなかった方もいらっしゃるかと思います。セグメント情報開示の前提となる報告セグメントを10%ルールに基づき判断する問題です。利益については少し細かい知識が必要でした。

久保 問題20は「固定資産の減損」の問題です。少し解きづらい問題だったかと思います。アの選択肢やエの選択肢で迷った方が多いかと思います。幸い、イ及びウについては、テキスト記載の論点でしたので、細かいところもしっかりと押さえられていた方は正答できたかと思います。が、しかし、厳しい問題だったかと思います。

問題21は「外貨換算会計」の問題です。基本的な問題です。基本的な論点が真正面から問われている問題が多かったですので、しっかりと正答していただきたいところです。

金杉 問題22は「ヘッジ会計」の問題です。本問は初見では難しい問題であり、解けなくてもやむを得ないでしょう。似たような問題を短答答練で出題しましたが、本問は償却原価法も加わっているため、難易度がアップしています。

久野 最後の4問は計算の総合問題ですね。

金杉 問題23～26は「連結財務諸表」の問題です。現行の総合問題1題の形式になってからは、総合問題は毎回、連結財務諸表からの出題であり、今回も予想通りの内容でした。成果連結、持分法、段階取得に係る差益と基礎期に学習する論点から出題されました。資本連結に関してはタイム・テーブルを書いて、成果連結については仕訳を下書きしてという、オーソドックスな解法で対応できたかと思います。個々の数値の算定については、特に高度な論点はありませんが、集計漏れに気を付ける必要があります。

久野 ありがとうございました。

さて、1年前の前々回平成27年第Ⅱ回短答式試験・前回の平成28年第Ⅰ回短答式試験は、合格得点比率はさておき、合格者数・合格率・合格者水準は違和感の無いものだったと考えています。前々回・前回の合格率・合格者水準を前提に、短答式試験合格者として財務会計論でどのような問題を正解しておく必要があるでしょう。

金杉 財務会計論－計算は全体の印象としての難易度は標準より易しいといった感じでした。問題22ヘッジ会計は初見では厳しいのでCランク、問題19のセグメント情報は直近10回で1回のみ出題だったため、十分対応できていない可能性を考慮してBランク、問題25親会社株主に帰属する当期純利益は集計数値が多いためBランクとしています。他はすべてAランクです。Aランクとした問題は直近の出題頻度も高い問題が多いですから、対策も十分できていたはずですよ。今回はAランクが多いので、Aをすべて取れば、B、Cはできなくても問題ないと思います。

久保 財務会計論－理論は、今回は、前回ほどではありませんが、正答を稼げる問題だったかと思います。冒頭でも述べました通り、しっかりと学習してきた方がその成果を発揮できる問題であったかと思います。

久野 得点・得点比率で言うとどれくらいになるのでしょうか。

金杉 財務会計論－計算では、Aランクをすべてとることで計算部分の配点104点中82点、78.8%の得点率になります。

簿記が得意な方にとっては目指すべき目標得点です。とはいえ、本試験では緊張して普段通りの実力が発揮できないこともあるでしょうから、もう1問ミスしてしまった場合、配点104点中74点、得点率71.2%でありこれでも十分合格レベルでしょう。

久保 財務会計論一理論部分として出題された問題は、問題1、問題2、問題6、問題7、問題8、問題9、問題11、問題14、問題16、問題18、問題20及び問題21の12問です。このうち、正答が難しいと思われる問題は問題14及び問題20でしょうか。したがって、本試験での緊張を考慮して、9問程度は正答できれば、合格レベルかと考えております。

久野 財務会計論一理論は72点ですか。75%になるのかな。

財務会計論一全体で146～154点、73～77%ですか。先生たち、ちょっと期待が高すぎませんか。この点数だと他者に対してかなりのアドバンテージが期待できるんじゃないでしょうか。もちろん、財務会計論で稼げる方は150点75%程度を確保して合格に近づくられるんじゃないかな。

さて、金杉先生、久保先生、受験生の皆さんに、メッセージをお願いします。

金杉 今回の短答式試験を突破して論文式試験に進む方は、重点的出題範囲にターゲットを狭め、引き続きこれまでのように基礎力強化に重点を置いた学習を進めてください。

次の12月の短答式試験を目指す方は、今回自分に足りなかったものが何なのか、全範囲に対する学習が追いついていなかったのか、覚えたつもりでいて実際に数値を算定しようとしたら知識が曖昧な論点がなかったか、練習量が足りないためにミスをしてしまっていないか、弱点を分析して、その弱点を克服するよう、今一度学習内容の見直しを図ってください。

受験勉強の繰り返しの毎日は決して楽しいことばかりではありませんが、前回解けなかった問題が今回は解けるようになった、しばらくスランプが続いたけれどようやく答練で思うような成績が残せるようになった、など数値化された成果として自分の成長を感じられるのは励みになるのではないのでしょうか。こうした日々の小さな成長が積み積み重ねて、やがて会計士試験合格という大きな果実を結ぶはず。目的地は遠い。それでも歩くことをやめなければ近づきこそすれ、遠ざかってゆくことは決してありません。

久保 まず、予想合格ライン前後にいる方は、論文式試験の学習に邁進してください。少々、予想合格ラインを下回っていたとしても、予想合格ラインが下がらないとも限りませんし、学習は全く無駄になりませんので、予断を持たせずに論文式試験の学習を行うべきです。

予想合格ラインに掛からなかった方やまだ入門基礎マスター段階の方は、今回の試験を受けたという経験は必ず生きてきますので、しっかり復習をして、12月短答式試験に繋げるようにしましょう。

ご存じのとおり、監査・会計業界は空前絶後の人手不足ですので、皆さんの合格を待っている法人や会社は沢山あります。早く合格して、一緒に会計業界のみならず、日本の経済社会を盛り上げていきましょう。私達は皆さんの合格を最大限サポートしますので、頑張ってください！

久野 金杉先生、久保先生、ありがとうございました。



本試験をふりかえる



司会 久野 元靖 講師

最後に

久野 さて、改めて、受験生の皆さんが気にされる平成28年第Ⅱ回短答式試験の予想合格ラインを検討してみましょう。

座談会冒頭にも述べましたが、公認会計士・監査審査会は、短答式試験の合格基準は、「試験実施規則」により「総点数の70%を基準として、公認会計士・監査審査会が相当と認めた得点比率となり、1科目につき、その満点の40%に満たないもののある者は、不合格となることがある。」としています。一方、例年「公認会計士試験受験案内」に記載されていた「試験の公平性の観点から、第Ⅰ回短答式試験と第Ⅱ回短答式試験の合格得点比率は、原則として同じとします。」という文言は「平成28年公認会計士試験受験案内」には記載されていません。

ここ3年間の短答式試験合格得点比率・合格者数・合格率・論文式試験受験者数・合格者数を振り返ると次のようになります。

- ・平成25年第Ⅰ回短答式試験では合格得点比率67%，合格者数1,071人，形式合格率10.73%，実質合格率13.64%。
平成25年第Ⅱ回短答式試験では合格得点比率67%，合格者数 695人，形式合格率 8.72%，実質合格率11.58%。
平成25年短答式試験年間合格者数1,766人，論文式試験受験者3,277人，合格者1,178人でした。
- ・平成26年第Ⅰ回短答式試験の合格得点比率70%，合格者数1,003人，形式合格率13.04%，実質合格率16.80%。
平成26年第Ⅱ回短答式試験の合格得点比率68%，合格者数 402人，形式合格率 6.12%，実質合格率 8.16%
平成26年短答式試験年間合格者数1,405人，論文式試験受験者2,994人，合格者1,102人でした。
- ・平成27年第Ⅰ回短答式試験では合格得点比率60%，合格者数883人，形式合格率12.25%，実質合格率15.92%。
平成27年第Ⅱ回短答式試験では合格得点比率67%，合格者数624人，形式合格率10.30%，実質合格率13.86%。
平成27年短答式試験年間合格者数1,507人，論文式試験受験者3,086人，論文式試験合格者1,051人です。

そして、今年、

- ・平成28年第Ⅰ回短答式試験の合格得点比率67%，合格者数863人，形式合格率12.28%，実質合格率15.75%でした。

今回の平成28年第Ⅱ回短答式試験の願書提出者数（願書提出者数）は、公認会計士・監査審査会から6,331人と公表されています。

現時点では平成28年論文式試験受験者数2,500人となっており、この2,500人＋平成28年第Ⅱ回短答式試験の合格者が平成28年論文式試験を受験します。

ここでは、データリサーチ等の受験生さんの得点状況を見ることはできませんので、まず、各科目レベルで考えてみましょうか。

金杉 財務会計論一計算では、配点104点中74点，71.2%の得点率でも十分合格レベルでしょう。

久保 財務会計論一理論では、9問（72点）程度を正答できれば、合格レベルかと考えております。

高岡 管理会計論では、75点前後が合格ラインとなるのではないのでしょうか。

野村 監査論では、60%～65%取れれば、大きな失点にはなっていないでしょう。

田崎 企業法は、70点とれば安心してよいだろうということでした。

久野 単純合計で、財務会計論74点＋72点＋管理会計論75点＋監査論60点～65点＋企業70点＝351点（70.2%）～356点（71.2%）。

ここまでの、そして、ここからの推定は受験者の皆さんの協力による「データリサーチ」の結果を見ずに行っています。したがって、その内容次第では、TACの予想合格ラインは修正されるかもしれません。また、合格得点比率・合格者数は、公認会計士・監査審査会によって決定されます。また、おそらくは、いくつかの問題で受験指導校の解答例が分かれることがあるかもしれません。過去には、受験指導校間で一致していた解答例が誤っていることになった場合もありますし、1つの問題について正解が2つあるとされたこともありますし、全員正解とされたこともあります。さて…

(中略。この部分、議論が長くなりますし、諸般の事情もございますのでご容赦ください。)

久野 それでは、先生方、よろしいでしょうか。

5月29日、23時00分現在、平成28年第Ⅱ回短答式試験を終えた段階での予想合格ラインとして、

形式的基準として「70%」がありますが、
公認会計士・監査審査会が
論文式試験受験者数を考慮するならば
総点数の「66・67・68%前後」
となると推測されます。

合格発表の日までは前向きに、
合格発表の日までにやっておくべきことをしっかり学習
されることを願います。

とします。

なお、ここで話した予想合格ラインは、TACの最終予想合格ラインではありません。この座談会の状況が皆さんの目に触れる頃には、「データリサーチ最終集計結果」も公表されています。必ず、「データリサーチ最終集計結果」を参照してください。

久野 今回の短答式試験、形式的には、想定どおり平成28年第Ⅰ回短答式試験同様の試験でした。ただ、前回第Ⅰ回短答式試験では財務会計論で得点を積み重ねられた方が多かったように思いますが、今回の第Ⅱ回短答式試験は財務会計論、特に理論で、なかなか得点を積み重ねることができなかったかもしれませんね。管理会計論でも取り組みやすい雰囲気は漂っていたのですが、案外、差がついているのかもしれません。前回第Ⅰ回短答式試験の合格者数・合格率に違和感がなかったのが、今回の第Ⅱ回短答式試験でも違和感のない合格者数・合格率であることを願います。

さて、関東のみならず、東海・関西、全国の講師の皆さん、お疲れ様でした。この後、まだ「解説」作成業務が続くと思いますが、そちらもよろしくお願いします。

受験生の皆さん、お疲れさまでした。平成28年第Ⅱ回短答式試験が終了して、今、いろいろな想いを抱かれていると思います。多くの受験生の方が似たような想いを抱かれていると思います。自分の心がリフレッシュを求めているならば、

ひと時のリフレッシュのための時間をとってくださいね。自分の心が次を視野に入れたら次に向かってください。これを読まれる頃にはとっくに学習を再開されているとは思いますが。

論文式試験合格を目標に学習を再開される方、ご自身のスケジュールがあると思います。TACの第2回論文式全国公開模試を目標にしながら、ご自身のスケジュールをこなしていきましょう。多くの講師が、弱点補強・弱いところをなくすようにと言っています。そもそも、論文式試験は「大問ごとに得点比率を算定」します。これは「アナ」となる論点等があると大きなマイナスダメージが生じることを意味します。論文式試験の評価システム自体が「アナを作るな」になってるんですね。「平均点レベル」でもいいから「アナはなくしてください」。ただ、注意をしてください。試験が近づけば近づくほど「良いものは維持し、悪いものは底上げをする」方向に行かなきゃいけない。何度も言っていることなのですが、第1回論文式全国公開模試で成績が良かった科目が第2回論文式全国公開模試で成績が悪くなる。第1回論文式全国公開模試で成績が悪かった科目が第2回論文式全国公開模試で成績が良くなる。第2回論文式全国公開模試で成績が悪かった科目が論文式試験で科目合格になる。第2回論文式全国公開模試で成績が良かった科目が論文式試験で足を引っ張る。珍しくありません。普通におこってしまう現象です。試験直前期って今までに一番ハードな時期なんです。まだ、終わってはいません、短答式試験という関所を通り抜けただけです。過去の論文式試験まで含めた個々人の成績の推移を見て思うことですが、可否は試験直前まで動きます。

残念な結果を予想される方もいらっしゃるでしょう。人生の岐路に立っていると感じられる方もいらっしゃるでしょうね。ご自身が公認会計士試験に挑戦しようと思った時のことを思い出してみましょう。なぜ自分は公認会計士になりたいと思ったのか。公認会計士試験に合格するためにどんなことをどのように行ってきたのか。公認会計士になりたいという気持ちはまだあるのか。数年後の自分はどうか。夢と現実の狭間で悩むこともあるでしょう。難しい問題だと思いますが、冷静さをもって様々な観点から慎重に考えていただきたいと思います。「**会計士受験生に贈る進路選択セミナー**」(6/17-14時-八重洲校)も参考になるかもしれませんね。

「個別成績相談・学習方法相談」に来られる方で「本試験だと点がとれないんです」とおっしゃる方がいらっしゃいます。多くの場合、アクセス答練の成績、短答答練の成績、論文答練の成績にその兆候は出てるんですね。その兆候があるからと言って残念な結果になるわけじゃないですが、予想外で残念な結果になった方の成績には、別の明確な原因がない限り、ほぼその兆候がでています。でも、その兆候が修正出来たら余裕で合格されていくんですね。「本試験だと点がとれない」とか「本試験に弱い」なんて言葉を都合の良い言葉にしないでください。メンタルな部分もあるかもしれませんが、なぜ合格得点比率に届かなかったのかを考えることが大切です。いろいろなものを犠牲にして学習しましたよね。なぜ点数が伸びないんだろう。基礎は大丈夫ですか。基礎だけにしていませんか。難しい問題を追っかけていませんか。学習方法が悪い意味での自己流になっていませんか。自分自身に「短答だけ」とかのリミッターをつけていませんか。短答式計算問題は「差額」というテクニックを多用していませんか。短答式理論問題の○×だけ追っかけていませんか。間違えたら知識の補填だけで終わっていませんか。テキストより問題集が好きだったりしていませんか。自分で学習範囲を狭めていませんか。短答式試験で求められている「体系的かつ正確な知識」をつけるように工夫していましたか。まだ学習し終わってないからということにして答練・アクセス答練の受講を先延ばしにしていませんか。通信で学習していて、答練の制限時間を無視していませんか。前向きに、自分自身に原因があると考えてみて下さい。自分自身に何を付け加えれば合格に近づくことができるのですか。

学習方法に迷いがある場合には「**学習・成績相談会**」(6/2-16時-新宿校・6/28-15時30分渋谷校)「**電話学習相談会**」(6/29-14時)で相談してみましょう。「**個別成績相談・学習方法相談**」(随時-各校)なら私も承ります。よく相談に来られた受講生の方から言われる言葉に「恥ずかしいんですけど」なんて言葉があるんですけど、恥ずかしい成績も素晴らしい成績も見慣れていますから、気にすることはないですね。

「**上級期学習法セミナー**」で時期別の学習法のヒントを聞くことができますし、その後、校舎によっては「**講師学習相談会**」で相談することもできます。これらに出席すると「**科目別学習法レジュメ**」「**会計士受験生のための就活入門**」「**合格体験記**」を貰えたりして良いことがありますよ。もちろん受講料最大50%OFFの「**奨学生選抜試験**」もあります。

TACでは、「短答科目強化期間」「論文対策強化期間」を明確にして12月の第Ⅰ回短答式試験の合格に全力を注げる「上級Wチャンス本科生」を開講します。あ、ここで誤解しちゃいけないのは、「短答強化」といっても「短答特化」という意味じゃないですからね。短答式試験を受験するからといって「短答特化」するのは、多くの場合、遠回りの傾向があるようですね。少なくとも、「講義」が展開されている期間は論文式試験合格を目標にコアな体系的理解を作り上げ、同時に短答を強化する学習姿勢を忘れないことが重要です。「租税法」「選択科目」については学習時期も選択できます。

基礎力不足を痛感される場合には、「財務会計論-計算／理論・管理会計論・企業法・租税法」の再確認をする「Re-view講義」セットコースもありますので、是非、基礎力を充実させていただきたいですね。期間限定ですが「超割」「早割」を利用するとお得になります。もちろん、財務会計論・管理会計論の「短答対策アクセス答練」「論文対策アクセス答練」、租税法の「アクセス答練」、財務会計論-理論・監査論・企業法・租税法・経営学の「理論補強答練」も標準装備です。

短答式試験免除者・第Ⅰ回短答式試験合格者の皆さん。まさかとは思いますが、「中だるみ」なんてしてないでしょうね。これからの残された時間は短答式試験受験者と同じですよ。5/29を境に時間的アドバンテージはもうなくなっていました。がんばっていきましょう。

短答式試験を受験された方、お疲れさまでした。TACは受験生の皆さんの学習をサポートしていきます。がんばっていきましょう。

追記：久野 短答式試験当日の座談会では、「データリサーチ」の結果を見ずに、出題水準からの予想合格ラインを検討しています。先ほど「データリサーチ中間集計結果」を一瞥しました。「予想合格ライン」は、大きな修正は行わないかもしれませんが、修正する可能性がありますので「データリサーチ最終集計結果」等を「データリサーチサイト」「@C.P.A.」等でご覧ください。